

世界的貧困に応答するポスト開発思想？： 「ローカル」の内部と外部

木山 幸輔

I. はじめに

近年、ポスト開発と呼ばれる思想潮流が、邦語圏において(も)大きな注目を集めている。多様な側面があるにせよ、ポスト開発思想は、「開発・発展・成長」といった概念による社会の編成を批判し、そこから「抜け出す」ことに重きを置く点に共通した特徴をもつが、このような議論が注目された背景として少なくとも以下のことが指摘できる。第1に、福島における原発事故後の「今回の事故を『例外』として処理し、『通常』に回帰しよう」とする動きの暴力性が指摘される中で(浪岡[2011:158])、そのような「通常」を形づくる価値の分析と代替価値の構想を提示するものとして注目されたこと。第2に、GDPのような指標を批判しつつ人々の生活の質の評価と結びつけるような形で指標を再編成すべきだとする議論から、既存の指標で捉えられない「異なった豊かさ」を提示するものとして注目されたこと(勝俣・アンベール(編)[2011:第3部])。とはいえ、そのような文脈において注目を浴びてはいても、ポスト開発思想の検討は未だ不足し、特にその重要な面である世界的貧困の問題への応答の構想——ポスト開発倫理⁽¹⁾——に対する検討の不足は顕著である(中野[2010:48])。そこで本稿では、ポスト開発思想の世界的貧困への応答の批判的検討をなすべく、その代表的論者であるセルジュ・ラトゥーシュの議論に焦点を当てて検討し、それを通じて導きだされる援助の構想への含意を析出していきたい(書評対象: Latouche[2004=

2010; 2007=2010; 2010=2013])。

II. ポスト開発思想の世界的貧困への応答

まず、ラトゥーシュのポスト開発倫理の構想の基本命題を析出しよう。

(a)既存の援助政策に孕む「開発／発展」概念は西洋中心主義的で有毒である。

：開発／発展の概念には、近代西欧文明に特有の経済的価値観・世界認識が働いており、第二次大戦後の国際開発政治において自文化中心主義的に機能してきた。開発プロジェクトの根底には文化的権力が働いている。

(b)ローカルな社会関係への「共通善と善き生活」の埋め込みを目指すべきである。

：南の人々の自律性を取り戻し、西洋近代的価値に支配されない生活様式にもとづく社会を維持していく「ポスト開発の時代」を目指すべきである。それはローカルな社会関係への「共通善と善き生活」の埋め込みによって可能になる。

以下ごく簡単に説明しておく。ラトゥーシュによれば、開発／発展概念あるいは開発プロジェクトには、進歩・自然支配・事物を数量で測る合理性といった価値が伏在している。しかし、それは近代西欧文明外において必ずしも受容されておらず、そのような価値に基づき進められる開発プロジェクトは文化的権力の装置として機能してしまう(Latouche[2004=2010:Ch. 2])。

そこで目指されるべきは、そのような開発／発展概念から脱し、地域主義へ向かうこと、す

なわち、地域の社会関係の中へ「共通善と善き生活」概念を埋め込んでいくことである(Latouche[2004:68=2010:80])。ラトゥーシュによれば、「一部の人がガンジーやトルストイの「シンプル・リヴィング」というスローガンの下で奨励するものを実践することで、平和で落ち着いた心を保ちながら、健全で安全な世界の内側で共に生きる歓びを分かち合う(コンヴィヴィアル)社会関係を成熟させながら本当の豊かさを再発見することが可能である(Latouche[2004:95=2010:105])」。

III. 検討

これらのラトゥーシュのポスト開発倫理を構成する命題をどのように評価すればよいだろうか。

III. 1. 援助の構想への示唆

まず、命題(a)は現行の開発プロジェクトを支える諸価値を分析しつつ、その普遍的妥当性とその援助構想においてもつ含意の再考を促す点で傾聴に値しよう。例えばラトゥーシュは現在影響力のある人間開発の概念に西洋の理想的生活様式の要素を見だし批判するが(Latouche[2004:43=2010:56])、そのような指摘は人間開発概念の形成において影響力をもったアマルティア・センの議論⁽²⁾が偏狭的で普遍化しえない特定の公理——例えば人間の主体性についての特定の想定——に基づいているという批判(Fabre and Miller[2003:136], 盛山[2006:219-20])、さらにそのことが人間開発の実践において画一化された生の想定にもとづく支配関係あるいは統治性をもたらしてしまうという批判(清水[2013: 8章])⁽³⁾の系譜に属するだろう。ラトゥーシュの議論はそうした系譜の中で開発の構想の再考を促しつつ、ありうる望ましい援助の構想が応答すべき課題——文化的偏狭性・グローバルな統治性からの脱却——の提示に成功

している⁽⁴⁾。紙幅の関係上、本稿では詳細に述べることを避けるが、この点は、イリイチ・デュピュイ・カストリアディスといった論者が消費社会批判・産業社会批判の中で蓄積した知見を通奏低音としつつ開発の概念の分析を行ったラトゥーシュの議論の魅力が遺憾なく示されているところである。

III. 2. 多様な善構想をもつ人々の居場所?

しかし、ラトゥーシュが開発／発展へのオルタナティヴ構想として提示する命題(b)は擁護しがたい。

第1に、ローカルな社会関係における善の構想の画一的共有の想定に陥っている。ラトゥーシュは地域をアイデンティティを共有する／すべきものとして描き(Latouche [2007:76=2010:190])、そこにおいて容認されうる欲求が決定されるという像を望ましいものとして描いている。曰く、南の社会において固有の文化的アイデンティティを再発見・再領有化すべきであり(Latouche[2007:93=2010:205-6])、そのようなアイデンティティに従って容認されうる欲求をコミュニティ全体——自治体単位——で決定すべきである(Latouche[2007:86=2010:199; 2010:79=2013:91])。しかし、このような地域コミュニティにおけるアイデンティティの共有の想定とそこにおける個人の欲求制約の承認は、善の構想を画一化されたものと描くことを許容し、画一化された善構想をもたない者の排除を招く。例えば、ラトゥーシュは「高価で役に立たないもの」——典型的にはハイ・ブランドの服があたり——を買うようなライフスタイルはコミュニティにおいて否定される、ないし居場所を失うものとする(Latouche[2004:98=2010:108])。しかし、あるコミュニティに生きる個人Aがあるハイ・ブランドの服装をすることを自身の善き生にとって不可欠のものと考えているものの、コミュニティの多くの成員は、それ

をコミュニティのアイデンティティを壊すとして否定している場合を想定しよう。この場合、個人Aの善構想はアイデンティティを共有するとされたコミュニティにおける共通の善き生の解釈(者)によって制約されることとなる。このことは、個人が是認しない生の構成要素をコミュニティが規定するという意味で、ラトウーシュの依拠する人々の「生きる楽しみの生産」(Latouche [2010:72=2013:84])にコミュニティが資するという想定を掘り崩すとともに(Dworkin[1989:484-7])、共通の善き生の解釈(者)の恣意性の問題、その解釈から望ましくないとされた善構想をもつ者の排除の問題をラトウーシュの議論が引き受けざるを得ないことを意味している⁽⁶⁾。これらの問題に対するラトウーシュからのありうる応答は、欲求は社会的に構築されるものであることを強調し(Latouche [2004:94=2010:105])、ある程度の欲求の画一性が地域のアイデンティティに基づく欲求の埋め込みによって成立するという想定をとることであろう。しかし、このような想定は、善構想あるいはその構成要素としての欲求がさまざまな機会に影響を受け得る——例えば、ポスト開発思想の講演に來たラトウーシュがそれまで欲求が一元的であるとされた地域に彼が飛行機内から持ち出したファッション雑誌を置き忘れてしまい、それを拾ったその地域内の個人にハイ・ブランドの服への欲求が生まれる場合がありうる⁽⁶⁾——ことを見落としており成立しない⁽⁷⁾。にも拘らずコミュニティにおける欲求の一元性を主張するならば、ラトウーシュの議論が「ゲマインシャフト的」なコミュニティ観に基づくノスタルジックなロマンティシズムに陥っているという批判(Nederveen Pieterse[2000:186-7])を免れえないことを意味する。

Ⅲ. 3. 南の人々の主体的決定の居場所？

第2に、ラトウーシュが命題(b)を主張する

とき、彼は南の人々の主体的決定の場所を奪いつつ、開発／発展概念の放棄とローカルな社会関係への生の埋め込みを主張してしまっている。つまり、命題(a)が開発概念に伏在する諸価値が普遍的ではないと示し得ているとしても、南の人々が自身の自己決定において、その決定に影響を受ける存在への正当化を企図しつつそれらの諸価値へコミットする可能性を否定することはできず、そのような主体的決定の居場所を奪いつつローカルな社会関係への生の埋め込みを主張することは、南の人々の実質的選択の可能性を予め排除してしまうことになるわけである(菅原[2000:78])。これは、特にラトウーシュが「エコロジカルな民主主義」が地域に根付くべきだと論じるとき、その民主的決定の内容として開発／発展概念とは相容れない共倫の倫理(コンヴィヴィアリティ)の概念を予め導入してしまっていることに顕著に現れている(Latouche [2010:78-9=2013:90-1])。この南の人々の主体的決定の居場所の剥奪は、第1の難点としての地域において共有されるアイデンティティや善構想という想定において、その共有される実質的内容自体すらも南の人々ではない存在によって予め規定されてしまっていることに起因する。

Ⅲ. 4. グローバルな関係の考慮の居場所？

南においてローカルな社会関係への「共通善と善き生活」の埋め込みを主張するラトウーシュは、そのような企図は北の諸国においても達成されるべきであるとも論じる。しかし、この際ラトウーシュの議論において第3の問題、すなわちグローバル世界における関係性を問い直す契機の出発点が出来てしまう。例えば彼はヨーロッパの諸政府に対して農業分野などでの「国内の諸活動の防護の構築・再構築、ならびに社会的保護の構築・再構築を行う体系的な関税政策」を含む保護政策を説く(Latouche [2012:68])。しかし、このような政策は貿易障

壁として機能し、現行のグローバル秩序が世界的貧困層に課している財へのアクセスの困難性を一層高め、グローバル秩序が世界的貧困層に与えている危害——回避可能である人権欠損を作り出す制度の維持——を永続・悪化させてしまいうる(Pogge[2008:18-23, 233-4, 263-4])。このような問題に対し、ラトゥーシュは世界中の地域で彼の述べる地域主義(ローカルな社会関係への「共通善と善き生活」の埋め込み)が成立するならば、南の人々の生活が北への生産物輸出に依拠することなどなくなり、問題はないと反論するかもしれない。しかし、仮に世界中での地域主義の実現というラトゥーシュの指定する理想理論情況の妥当性を認めたとしても、少なくとも現行の非理想理論情況におけるグローバル秩序の編成を無視しつつ関係の考慮をローカルなものだけに帰属させることは、それを越える関係性についてはそれが不正な関係であるとしても考慮しない、グローバルな政治的パースペクティブの欠如に陥っていることを意味してしまう(Nederveen Pieterse[2000:187], Schwartzman[2012:119, 122])⁽⁸⁾。ローカルで自足した社会の並立を理想理論として描いたとしても、我々の生きる世界は非理想理論情況にあり、ラトゥーシュが「健全で安全な世界」だとする地域を超えた、グローバルな関係性の考慮や変革を必要とするわけである⁽⁹⁾。

IV. ポスト開発思想の検討からの、援助構想への示唆

以上、世界的貧困に応答するポスト開発思想の代表として、ラトゥーシュのポスト開発倫理に焦点を当て、その意義と困難を論じてきた。そこで明らかにされたのは、その議論は開発における文化的偏狭性や統治性の指摘としては妥当でありつつも、3つの居場所の剥奪——多様な善構想をもつ人々の居場所、南の人々の主体的な決定の居場所、グローバルな関係の考慮の

居場所の剥奪——を含んでいるということであった。そこで必要なのはこれらの居場所を確保しうる援助のアプローチの構想である。

ここでは、ウィリアム・イースタリーによって主張されるような「サーチャー型」の援助構想をそのような要請を満たしうるものとして示唆しておきたい。イースタリーは、北のエリートが地球大のプランをトップから描いて援助を進めていくべきとする発想をなす人々を「プランナー」——典型的にはジェフリー・サックスの議論が当たるが、開発へのオルタナティブ構想を地域主義的な形で予め想定するラトゥーシュの議論にもそのモメントを看取しうる——と呼び、逆に貧困下にある人々が貧困から抜け出すために何を必要としているかをボトムから調べ、そのような必要に応答すべく試行錯誤をなし、その結果にアカウンタビリティとフィードバックの回路をもつような人々を「サーチャー」と呼ぶ(Easterly[2006=2009:Ch.1])。サーチャーに重きを置くサーチャー型援助構想の特徴は、援助対象となる国(社会)の当事者こそが問題解決のための知識をもち、その国(社会)の当事者によって志向される解決策を試行錯誤とともに実行していくべきである点にある。

なお誤解を避けるために述べておくなら、このような議論は国際的援助やグローバルな制度の変革の可能性を否定するものではない。例えばアマルティア・センは、サーチャーの知を用いた援助構想の妥当性をある程度承認しつつも、イースタリーの構想は「援助と関係しない個々の努力(unaided individual efforts)」によって貧困からの脱出を求めるものとし、貧困を協力して削減する努力を否定してしまうものと解している(Sen[2006:173])。しかし、イースタリー自身が医療・水道・衛生などの分野における国際的援助プランの成功を認識しているように(Easterly[2006=2009:Ch.5])、彼の議論はサー

チャーのフィードバックの回路を通じ、グローバルな制度変革・援助が求められる場合があることを否定してはいない⁽¹⁰⁾。

このようなサーチャー型の援助構想は、先の3つの居場所を保持することができる。第1に、多様な善構想をもつ人々の存在を否定する必要はない。サーチャー型構想においては貧困地域において機能している慣習法規範などに配慮をする必要性は説かれるが(Easterly[2006:93-101=2009:111-20])、そのような地域で成立している規範を重視することは画一的なアイデンティティや善構想の重視を意味するわけではない。第2に、サーチャー型構想においては援助対象となる地域からのフィードバックの回路を重視することで、南の人々の主体的決定の居場所を確保することができる。サーチャー型構想の特徴は援助の在り方を決定する主体を、プランを手に統治する北のエリートから、南の現地の人々、あるいは彼らとともに貧困に取り組むNGOや援助機関の人々として描き直す点にあるが故である。第3に、サーチャー型構想は現行のグローバル秩序が貧困の生起・継続にもたらす影響をフィードバックの回路を通じて提示し、問題化していく潜勢力を持つ。

V. 結

以上、ラトウーシュの開発倫理の検討を通じ

て援助の構想への示唆を探るべく論を進めた。本稿で幾分強調を行なったのは、ローカルな社会関係への期待は、その内部に対しては多様な人々の生の抑圧を、外部に対しては現行の関係の軽視を招来する危険と隣り合わせであるという認識の必要性であった。南における世界的貧困という惨状。その惨状を生み出す世界のあり方から目を背けるのでも、南の人々が生きるあり方に北に生きる誰かのあり方の理想を託すのでもなく、現実へ応答し続けること。求められているのはそのことである。

※本稿は文部科学省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)の助成による研究成果の一部である。

※本稿は2012年12月に提出された修士論文「世界的貧困への応答としてのグローバルな正義：正義の存立、共同体、人権、援助へのアプローチ」の3章1節(125-9頁)において展開された議論に大幅に修正を加えたものである。修士課程のご指導を賜った山脇直司教授、書評対象の一部の講読の機会をお与え頂いた関谷雄一准教授、本稿の草稿にコメントを頂いた森政稔教授、松原隆一郎教授及びそのゼミ参加の諸兄・姉、匿名の査読者に感謝申し上げる。

註

1. 以下、世界的貧困の問題へのポスト開発思想の応答をポスト開発倫理と呼称する。また、本稿では開発の潜在的对象となってきた世界的貧困層を「南(の人々)」、開発主体と措定されてきた人々を「北(の人々)」と呼称する(cf.見田[1996:85-7])。
2. とはいえ、セン自身は人間開発指標を「粗野な指標」と評したこと(UNDP[1999:23])には注意が必要である。
3. この点については「開発／発展の言説」が西欧の第三世界についての知を権力・干渉と結びつけることになると指摘するEscobar[1995]も参照のこと。
4. これらの課題への応答を試みつつ、世界的貧困への規範的要請を正当化する一つの試みとして木山[2014]を参照のこと。

5. コミュニティへの期待の孕む同様の問題の指摘として伊豫谷・斎藤・吉原[2013:33, 63-4]も参照のこと。
6. ラトウーシュは、旅行目的での飛行機の使用をエコロジカル・フットプリントを悪化させるとして倫理的に批判している(Latouche[2007:63-6=2010:178-80])が、自身が日本に講演に来たときには飛行機で来ているようなので、飛行機を使って自らの住む地域と異なる地域へ行くことが何らかの場合には許容されているようである。
7. このことは、「古典的な人類学者たち」によって描かれてきたような内部の倫理的一元制・文化的秩序の非論争性を前提としている社会の想定は今日において妥当ではなく、そのような想定に固守する場合には「抑圧的コミュニタリアニズム」に陥ってしまうという問題(Fraser[2003:54-5, 76])の一面である。
8. より精確に述べれば、ラトウーシュにおいて理想理論としての最終結果状態の描写に固執することが、非理想理論としての移行期を描く理論の不備を招き、そこにおける深刻な不正を考慮に入れることに失敗する結果となっている。ラトウーシュと同様に一定の自足性をもった諸共同体による世界秩序を理想理論の要請としての最終結果状態として描きつつも、共同体間の貿易の公正さをも要求し、それが失われている場合には移行期を描く非理想理論の要請として是正されるべきとするRawls[1999:42-3, 115]の記述と比較せよ。なお、最終結果状態を描く理想理論と移行期を描く非理想理論の区別についてはRawls[1999:89], Valentini [2012:660-2]を参照のこと。
9. なお、本稿では世界的貧困の維持に関わる現行グローバル秩序へのラトウーシュの態度に焦点を当てたが、ここで2つの注意が必要である。第1に、ラトウーシュは南北における「生態学的な債務」の返済の必要は認識しており(Latouche[2007:62=2010:176])、地域を超える考慮のモメントも存する。第2にラトウーシュが自身の理論を革命的でなく改良主義的とすること(Latouche[2007=2010:Ch.3; 2010:58, 159=2013:71, 174])に着目することで、非理想理論状況における不正に対処する可能性をラトウーシュ理論内在的に構想することも理論的可能性としては存する。しかし、ラトウーシュ自身の政策提言において先述の保護主義政策が示されているため、本稿ではその点に関して非理想理論の不備として捉えている。
10. なお、サーチャーの回路から地球大の援助プランが求められうることと、援助現場における一般化を避けることは両立しうる。援助における一般化された教訓——例えばランダム化対照試行からの5つの教訓(Banerjee and Duflo[2011:268-73=2012:348-55])——の提示に対するイースタリーによる批判(Easterly[2011.4.30])を参照のこと。

文献

- Banerjee, Abhijit V and Esther Duflo (2011) *Poor Economics: A Radical Rethinking of the Way to Fight Global Poverty*, New York: Publicaffairs. =(2012) 山形浩生(訳)『貧乏人の経済学：もういちど貧困問題を根っこから考える』みすず書房。
- Easterly, William (2006) *The White Man's Burden: Why the West's Efforts to Aid the Rest Have Done so Much Ill and Little Good*, New York: Penguin Books. =(2009) 小浜裕久・織井啓介・富田陽子(訳)『傲慢な援助』東洋経済新報社。
- Easterly, William (2011.4.30) "Measuring How and Why Aid Works-or Doesn't," *The Wall Street Journal*.
- Dworkin, Ronald (1989) "Liberal Community," *California Law Review*, 77(3):479-504.
- Escobar, Arturo (1995) *Encountering Development: The Making and Unmaking of the Third World*, Princeton: Princeton

University Press.

Fabre, Cécile and David Miller (2003) “Justice and Culture: Rawls, Sen, Nussbaum and O’Neill,” *Political Studies Review*, 1: 4-17.

Fraser, Nancy (2003) “Social Justice in the Age of Identity Politics: Redistribution, Recognition, and Participation,” in Nancy Fraser and Axel Honneth, *Redistribution or Recognition?: A Political-Philosophical Exchange*, London/New York, Verso, 7-109.

伊豫谷登士翁・斎藤純一・吉原直樹 (2013)『コミュニティを再考する』平凡社新書。

勝俣誠・アンベール, マルク(編) (2011)『脱成長の道』コモンズ。

木山幸輔 (2014)「グローバル世界における人権の導出：自然法アプローチと尊厳構想へ向かって」政治思想学会編『政治思想研究』14(掲載予定)。

Latouche, Serge (2004) *Survivre au développement: De la décolonisation de l’imaginaire économique à la construction d’une société alternative*, Paris: Mille et une nuits. =(2010) 中野佳裕訳『経済成長なき社会発展は可能か? : 〈脱成長〉と〈ポスト開発〉の経済学』作品社、21-126.

Latouche, Serge (2007) *Petit traité de la décroissance sereine*, Paris: Mille et une nuits. =(2010) 中野佳裕訳『経済成長なき社会発展は可能か?: 〈脱成長〉と〈ポスト開発〉の経済学』作品社、127-265.

Latouche, Serge (2010) *Pour sortir de la société de consommation: Voix et voies de la décroissance*, Paris: Les liens qui libèrent. =(2013) 中野佳裕訳『〈脱成長〉は、世界を変えられるか?: 贈与・幸福・自律の新たな社会へ』作品社。

Latouche, Serge (2012)「緊縮型景気刺激策の二重の欺瞞」中野佳裕訳『現代思想』40(1):67-71.

見田宗介 (1996)『現代社会の理論：情報化・消費化社会の現在と未来』岩波新書。

中野佳裕 (2010)「ポスト開発思想の倫理：経済パラダイムの全体性批判による南北問題の再検討」『国際開発研究』19(2):37-59.

浪岡新太郎 (2011)「政治的想像力を取り戻す」日本平和学会編『平和研究』37: 155-160.

Nederveen Pieterse, Jan (2000) “After Post-development,” *Third World Quarterly*, 21(2): 175-91.

Pogge, Thomas (2008) *World Poverty and Human Rights: Cosmopolitan Responsibilities and Reforms 2nd Edition*, Cambridge: Polity.

Rawls, John (1999) *The Law of Peoples with “The Idea of Public Reason Revisited,”* Cambridge: Harvard University Press.

Schwartzman, David (2012) “A Critique of Degrowth and its Politics,” *Capitalism Nature Socialism*, 23(1):119-25.

盛山和夫 (2006)『リベラリズムとは何か：ロールズと正義の論理』勁草書房。

Sen, Amartya (2006) “The Man Without a Plan: Can Foreign Aid Work?,” *Foreign Affairs*, 85(2):171-7.

清水耕介 (2013)『寛容と暴力：国際関係における自由主義』ナカニシヤ出版。

菅原鈴香 (2000)「貧困概念をめぐる一考察：開発学と人類学からの貢献とヴェトナムの貧困の現状と限界」『国際協力研究』16(1):69-79.

UNDP (1999) *Human Development Report 1999: Globalization with a Human Face*, New York: Oxford University Press.

Valentini, Laura (2012) “Ideal vs. Non-ideal Theory: A Conceptual Map,” *Philosophy Compass*, 7(9):654-64.

